

今日のお話は、「帰ってきたサマリヤ人」という題です。昔、映画やテレビの題名で「帰ってきたウルトラマン」とか「帰ってきた用心棒」なんてありました。のっけから自分のつけた題にケチをつけるわけではないのですが今日の話に出てくるサマリヤ人は別にもともとイエス様と一緒にいたけれどもどこかに出かけて帰ってきたわけではありません。むしろ、初めてイエス様のところに来たのです。それでもこのサマリヤ人にとって本当に自分が帰るべき所に帰れたのではないかと思うのです。「帰ることができるのは嬉しいことですね。「帰ろうかな。」と思っても、帰る場所がない。そういう人もいるのです。今日の一人の人物、目立たない人物なのですが、その人の姿を見ながら、私達も、『一体、私の「帰って行く所」はどこなのだろうか。』そういうことについて、考えてみたいと思います。

「イエスはエルサレムに上られる途中、サマリヤとガリラヤの境を通られた。」とあります。主イエスは今、エルサレムへと上る旅の途中にありました。地図で言えば南下しています。このエルサレムへの旅の途中で、サマリヤとガリラヤの間を通られたのです。ただしこれは普通の旅行のコースではありませんでした。人々はそこを通ることを避けていました。そしてもっと困難な道をわざわざ通っていたのです。それはエルサレムにいるユダヤ人とサマリヤ人との間に対立があったからです。それも犬猿の仲と言おうかわざわざ大変な道を通ってまで会わないようにしていたのです。残念ながら、そういうのは、現在でも、あると思います。

そんな中、主イエスが境の道を通ってある村に入ると、「十人のツァラアトに冒された人がイエスに出会った。彼らは遠く離れた所に立って、声を張り上げて、『イエスさま、先生。どうぞあわれんでください』と言った。」というのです。ツァラアトとは重い皮膚病のことです。以前の聖書にはここは「らい病」と書かれていました。つまり今日の「ハンセン病」のことだと思われていたのです。しかし聖書に出てくるこの病気とハンセン病は違うことが明らかになってきました。ですから「重い皮膚病」新改訳ではそのままツァラアトとなっています。名前とはともかく大事なことは、当時この病気にかかった人は、「汚れた者」と見なされ、一般の人々と共に住むことも、近くに寄ることもできなかつたのです。旧約聖書ではこの病気にかかった人は、「わたしは汚れた者だ」と言わなければならない、他の人にその汚れが移らないように、常に周囲の人に、「私に近付かないでください」と言わなければならないという決まりになっていました。そして一般の人々から隔離されて暮らさなければならないという、そんな扱いを受けていたのです。皆さんは、自分が生きて来た何十年かの間、「汚れた者」という略印を押されたことがあるでしょうか。「ない。」というのが普通ではないでしょうか。中には「私は風呂嫌いで一カ月に一回しか入らない」という人がいるかもしれませんがそれは汚れているのではなく、不潔で臭いということです。そういうことではなく「汚れている」というのは自分の存在そのものが否定されているようなことだったので、10人が10人とも自分の病気を恨み、これさえなければ自分は幸せになれると思っていたことでしょう。さらに一人はサマリヤ人ということでユダヤ人からは目の仇にされていましたから、ひよっとしたらそのグループの中でも辛い立場に置かれていたかもしれません。

その病気を煩っている人々が、主イエスを出迎えたのです。主イエスのうわさが届いていたのでしょう、主イエスが来られることを知った彼らは、早速癒しを願ってやって来たのです。しかし彼らはどうしたかと言うと「遠く離れた所に立って、声を張り上げた」と言うのです。汚れた者であるがゆえに、主イエスのそばに行ってお願ひすることができないのです。ですから遠くから大声で「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください」と叫んでいるのです。彼らのこの姿を想像すると私は感動します。彼らは必至

でした。この機会を逃したらもう会う機会はないかもしれない。近づけないのなら大声を出すしかない。それは彼らの中に何としても「治りたい」「よくなりたいたい」という求めがあったからです。「わたしは汚れているからそんなところに出ていけない」とか「どうせ自分なんかに目を留めてもらえることはない」、中には「神様の方から来てくれたら良いのに」と思ったりするとしたら、それは実は本当によくなりたいたいとは思っていないからかもしれません。遠くにいるままで、彼らは叫び、そして主イエスの方も声を張り上げて「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」とおっしゃったのです。その瞬間には癒しはおきませんでした。彼らは、祭司のところへ行く途中で癒されたのです。

ところでなぜ主イエスが「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」とおっしゃったのでしょうか？これは旧約聖書のレビ記に書かれていることですがこの病気は、祭司たちによって「病気である」と判断され、また治った時にも祭司たちによって「治った」と判断されて初めて社会復帰ができる、というものでした。その判断は祭司によってなされます。主イエスが「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」とおっしゃったのは、「祭司たちの所へ行って体を見せ、自分たちが聖くなった、癒されたことを判定してもらいなさい」ということなのです。主イエスのそのお言葉を受けて、彼らは祭司の所へ向かったのです。そしてその途中で癒しが起ったのです。つまり彼らが祭司の所へ向かった時点ではまだ癒しは起っていませんでした。彼らは、癒されたという実感もないのに、また目に見える癒しの事実がないのに、主イエスのお言葉を聞いてその通りに、癒されたことを判定してもらうために祭司のもとへと向かったのです。考えてみればこれはすごいことですよね。彼らはまさにそういう信仰によって歩んだのです。その信仰の歩みの途中で、癒しが起ったのです。ここには、信仰を持って生きるとはどういうことかについて大切なことを教えていると思います。「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」ヘブル 11 章 1 節とあるようにみ言葉を信じて、み言葉のみを頼りにして、目に見える現実や実感はなくても一步を踏み出すのです。救いの事実や実感はその歩みの中でこそ与えられていきます。つまり信仰者となることにおいて、私たちは、自分の実感や目に見える救いの印にこだわってはいけません。自分の実感や目に見える事柄よりも、神様のみ言葉に信頼を置き、それにより頼むという決断が信仰においては大切なことなのです。その意味においてここに出てくる十人の人々というのは、その十人の全員が、私たちが信仰において模範とすべき人々です。主イエスのみ言葉を信じて、そのみ言葉のみを頼りに、癒されるという前提のもとに祭司のところに向かったわけですから。そして十人が十人も、その歩みの途中で癒され、聖くされたのです。

しかし実はこの話の中心はその後の 15 節以下です。「そのうちの一人は、自分のいやされたことがわかると、大声で神をほめたたえながら引き返して来た」というのです。この人は主イエスのもとに戻って来た、そして「イエスの足もとにひれ伏して感謝した。」のです。「彼はサマリヤ人だった」と語られています。そして主イエスは「十人きよめられたのではないか。九人はどこにいるのか。神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」とおっしゃいました。主イエスのもとに戻って来て感謝したのは、サマリヤ人一人のみだったのです。

皆さん、どう思われるでしょうか。他の九人は、どこに行ったのでしょうか。もちろん、祭司のところに行ったのだと思います。その後、どこに行ったのでしょうか。恐らく、家族か友人のところに行って全快祝いパーティーなんかしていたかもしれません。戻ってきたのは一人のサマリヤ人だったのです。面白いと思いませんか。世の中で、嫌われて、嫌がられて、汚いと言われていた病気、そのうえこの人は、サマリヤ人であるということで、どれだけ嫌な思いをしてきたのか分からない。その一人だけが、主イエス

のところに帰って来たのです。主イエスは「神をあがめるために戻ってきた者」と言われました。主のもとに帰って来たのです。どうして、その一人だけが、帰って来たのでしょうか。十人の人は皆、信仰があったのではないのでしょうか。九人だけが信仰がなく、一人だけ、信仰があったからでしょうか。信仰がなかったら、おそらく、治らなかったでしょう。ですから信仰の問題ではないのです。こういうことではないかと思うのです。この九人は、自分が持っている症状、外に現れている部分が、問題だと思っていたのだと思うのです。つまり、「ツァラアトという病気さえなくなれば、それで、私は幸せになる。」と思っていたのでしょうか。ですから、癒された時に、「これで、私は大丈夫だ。」と思ったのではないのでしょうか。ところが、19節でイエス・キリストの言われた一番最後のところに「あなたの信仰が、あなたを直したのです。」と書かれています。これは「良くなる」ということで、最初に10人が癒された、聖められたとは違うことばなのです。「癒される」と「良くなる」とは違うのです。

その違いは分かりやすく言うところのことです。多くの人達は、何故教会に来るのか。何故神様に祈るのかというと、この九人のように、考えているからです。どういうことかと言うと、「今私の持っているこの怒りが、今私の持っているこの心の痛みが無くなり、この問題が解決さえすれば、幸せになれる。」と知っているのです。そういった症状、表面に出てきている問題が片付けばそれでいいと思ったのだと思うのです。でも、実際そうでしょうか。おそらく、周りの人は、いつも、こう思うでしょう。「あの人、きれいになったというけれど、また、いつ出てくるか分からないよね。」私達、そう思いませんか。誰かが、「いや、心を入れ替えた。」などと言うのを聞くと、「まあ、いつまで続くでしょうかね」しばらくして、また失敗すると、「だから、言ったでしょう。」と言って疑心暗鬼の思いで見ている。するとその本人は、それを証明するために、また今度、何かをやらなければならない。いつも祭司が出す判定に怯えながら生きるのです。一生、それなのです。そういう生き方は、辛いです。何故か。証明しなければならないのです。「私はよくなった。」ということをして、証明して、祭司から許可をもらわなければならないのです。おそらく、この残りの九人は、これから、ずっとこうやって生きてゆくのです。それから病気のことは片付いたけれど、次は家族の問題、自分の仕事のこと、仕事上の人間関係の問題というようにいつも出てくる症状、植物で言うなら次々と出てくる悪い実を取り続けなければならないのです。

もう一人の人は、どうしたのでしょうか。帰って来たのです。誰のところへ帰って来たかと言うと、直してくれた人です。受け入れてくれた人のところ、主イエス様のところに帰って来たのです。このサマリヤ人は、こう考えたのです。「私の人生、今から使って、自分がどれだけきれいになったかを証明して回るよりは、もう既に、ここで、私を受け入れて、直してくれた人がいるではないか。その人に感謝して、その人に付いて行きたい。」と思ったのです。そして、彼は、心から感謝したのです。九人は感謝できなかったのです。癒された時に心の中で少しは感謝したと思いますが嬉しさの方が優ってしまって感謝を口で言い表すことも出来なかったのです。しかしこのサマリヤ人は、引き返して来て、イエス・キリストの足元にひれ伏して感謝して、神様をあがめたのです。清々しいですね。私達はなかなかそのようなことは出来ませんね。神様にいろいろなことをしてもらいました。または、友達でもいいでしょう。いろいろなことをしてもらっている。親でも、そうです。だから足元にひれ伏して、感謝するなんてことありますか。あるどころか、「私だって、やってあげているじゃないの。」などと思ったり、「親だから、当たり前だ。」と試してみたり、素直に感謝することができるのでしょうか。私達は、感謝するために帰っていく場所がある、ということは、本当に、嬉しいことなのです。礼拝に来ると言うことは神様に感謝をささげるために帰ってくる場所なのです。日々の歩みの中で嬉しいこと、感謝すべきことがいろいろあると

思います。その時にこの恵みを教会の皆と分かち合いたいな、礼拝の時に感謝と賛美を捧げたいなと思うならこの帰ってきたサマリヤ人と同じです。これさえうまく行けば良いのに。これがうまく行くように神様働いてください。それは症状さえ無くなれば人生すべてうまく行くと思っているとするなら、生涯問題に振り回されて生きることになると思います。癒されても良くなってはいないのです。

まだクリスチャンでない方は自分にとって帰るべきところはどこか考えていただきたいと思います。そしてイエス・キリストのところに帰ることこそ本当の平安があることを覚えていただきたいと思います。クリスチャンの方にとっても教会が帰るべきところとなっているのでしょうか？ 残りの 9 人のように自分が聖い者、しっかり自立している者、思いやりのある者であることを証明しなければならない世界、祭司が大勢いるようなところが教会であるならそれは辛いことだと思います。他人の信仰があれこれ気になるとしたらひょっとしたら自分が祭司になってしまっているのかもしれないね。

私たちは今、人生の歩みの途中で、自分の歩みを中断して、主イエスのもとに戻って来て、神様を賛美し、主イエスの足もとにひれ伏す礼拝をささげています。最後に主イエスは私たちに、「立ち上がって、行きなさい。」と言って下さっています。このことばを以て私たちはこの礼拝から、立ち上がり、出てゆくことができるのです。様々な問題をかかえ、苦しみや悲しみを背負った人生の歩みへと、難しい人間関係へと、仕事や家庭において抱えている困難な課題へと、そしてそれぞれに与えられている働きや奉仕へと、主イエスが既に与えて下さっている救いの恵みに支えられて、出かけて行くことができるのです。これからの一週間の歩みには、失敗も多く、うまくいかないこともあり、思い通りにならないことが多々あるでしょう。しかし私たちはまた来週、この礼拝へと、主イエスのもとへと戻って来て、また新たに、み言葉による癒しと慰めと力づけを受けることができます。みことばを信じて一歩踏み出しましょう。そして恵みのみわざを体験したならば教会に帰ってきて主を賛美し、主に感謝と栄光をもって礼拝を捧げたいと思うのです。